

地域農業を牽引する有機栽培を目指して！

(置戸町 「置戸マルタ(丸富青果)」(代表:佐久間 孝 氏)



写真1 丸富青果 全景

1 経営の概要

- (1) 有機栽培経験年数 22年(昭和62年度から取り組み)
- (2) 経営形態 法人経営(従業員38名)
- (3) 生産者・構成員 120名(平成21年度)

(単位:名)

区分	たまねぎ	ばれいしょ	にんじん	メロン
有機栽培	8	—	—	2
特別栽培	19	3	21	—
慣行栽培	43	25	10	—

※重複者含む

- (4) 経営規模(栽培面積): 290ha(平成21年度)

(単位:ha)

区分	たまねぎ	ばれいしょ	にんじん	メロン
有機栽培	16	—	—	18a
特別栽培	27	7	35	—
慣行栽培	87	103	15	—

- (5) 主要作物の生産量(平成20年度)

(単位:t)

区分	たまねぎ	ばれいしょ	にんじん
有機栽培	700	—	—
特別栽培	1,500	170	1,300
慣行栽培	5,200	2,700	500

2 有機農業取組の経緯等

(1) 有機農業の取組動機

- ・「丸富青果」は 1972（昭和 47）年から置戸町境野で農産物の集荷販売事業を始め、主にたまねぎ、ばれいしょ、にんじんを中心に扱い 1986（昭和 61）年 8 月に有限会社「丸富青果」とした。
- ・先代の佐久間富男氏が質の良い青果物を直接消費者へ届けることができないものかと、栽培と流通の仕組みを模索していたところ、1987（昭和 62）年に有機農業を実践していた「マルタ有機農業生産組合（現：株式会社マルタ）」^{注1}と出会った。
- ・作物に有用な土壌微生物の活躍が味の決め手となることを知り、食への取組みをはじめた。

注 1：「マルタ有機農業生産組合（現：株式会社マルタ）」

1975 年に熊本県で設立された「モグラ堆肥」^{注2}等による土づくりを基本とした有機農業実践会社である。現在は、東京に本社を置き、全国ネットワーク約 100 グループ組合員 800 名にて野菜・果樹の通年出荷を行っている。

注 2：「モグラ堆肥」とは、菜種粕、大豆粕、発酵コーヒー粕、米糠などを混ぜ合わせ独自の発酵菌とともに発酵させた基本堆肥に、魚粕や大豆粕、グアノ、カニガラなどを混合し再度発酵させて製造する有機物由来の原料だけを使用した発酵肥料。

(2) 取組経過

- ・有機農業の取り組みは、玉葱 9 名、馬鈴薯 1 名、人参 1 名にてスタートした。玉葱や人参の除草作業は予想以上に重労働、馬鈴薯は病害に晒されるなど、有機農業を継続していくことが如何に難しいかを思い知らされた。
- ・取り組みを始めて 10 年、作業機械の進歩、耕種的管理のマニュアル化により、何とか継続の見通しが立ち、2000（平成 12）年に「置戸マルタ」^{注3}の名称で有機 JAS の認定を取得した。
- ・現在、構成農家では、有機栽培をはじめ、特別栽培や減農薬栽培等を行っている。

注 3：「置戸マルタ」とは、有機農産物の「生産工程管理者」としての法人格を有さない名称です。

(3) 有機農業取組みの考え方

- ・作物に有用な土壌微生物の活躍が味の決め手となるアミノ酸や核酸のほか、ビタミンやホルモン、酵素など、ごく微量で作物の栄養や健康に大きく影響することを学びました。有機農業は土づくりから、その成否は「たい肥の質」にあると考えます。
- ・取り組みを始めて以来、使用している完熟発酵させた有機肥料「モグラ堆肥」により土づくりを行う。
- ・単に無農薬というだけでなく、如何に収量・品質を落とさず、味を良くする栽培方法を確立すること、再生産が可能な経営体であることに主眼を置く。

(4) 有機 JAS 及び生産公表 JAS の認証の取得

- ・平成 12 年に、有機 JAS の認定を取得
- ・平成 19 年に、生産情報公表 JAS の認定を取得

3 有機栽培管理技術等の特徴（たまねぎ）

[有機栽培管理の概要]

(1)品 種： オホーツク222及びオホーツク1号（ともに早生種）

(2)作業体系

2月下旬～3月上旬(育苗)	4月下旬～5月上旬	7～8月	8月上旬～	8月中旬～	9月上旬～
は種	移植	手取除草	根切り	収穫	調整・選別

(3)生産性： 平 年：約4,500kg/10a（北見地区平均：約5,700kg/10a）
21年：約3,700kg/10a（北見地区平均：約5,400kg/10a）

(4)等 級： 秀・優

(5)サイ ズ： 2L～S（規格外：有）

[栽培管理技術等のポイント、工夫]

(1)土づくり

- ・有機物施用：「モグラ堆肥」を主体に牛糞堆肥や動物性有機物（鶏糞、魚粕）、植物性有機物（米糠、菜種粕）および有機質肥料を施用

・有機物種類：

「モグラ堆肥」200～300kg/10a

牛糞たい肥 3～5t/10a（前年秋施用）

※緑肥（えん麦等）を輪作体系に組み入れ土質改善を行っている。

(2)病虫害防除

- ・生物農薬や銅剤を主体に3～5回防除を行っている。

(3)雑草対策

- ・除草カルチを3～4回程度、手取り除草を4回程度行っている。

(4)その他

- ・生育活性を目的に木酢液を使用している。



写真2 選果風景

4 生産物の出荷・販売

(1)有機 JAS 農産物販売実績（平成20年度）

（単位：t）

区 分	たまねぎ	メロン
販 売 量	700	5



写真3 有機栽培たまねぎダンボール

(2)主な販売先

- ・コープさっぽろ、首都圏コープ、イオングループ

5 消費者との交流の取組み

(1)生協組合員との産地交流

- ・消費地での生協組合員を対象とした学習会や、栽培現地でのたまねぎの収穫・タッピング作業などを見学してもらい、有機栽培の現状を知ってもらう交流活動を行っている。

(2)産直交流会への参加

- ・産直交流会に参加し有機栽培の現状や取組などについて報告し、理解を深めてもらう活動を行っている。

6 生産者のつながり、関係機関・団体等との関わり

(1) コントラクト事業による支援

- ・丸富青果がコントラクト業務を行い、人と機械を投入して生産活動の一部代行を行っており、有機栽培・特別栽培を継続するために欠かせない除草作業や、移植作業、収穫作業などの補助作業を行っている。
- ・栽培、収穫、選別工程を一元管理し、構成農家の計画的な生産を支援している。

(2) 学習会の開催

- ・栽培管理における技術課題の共有化や生産行程の統一化を図る目的で、各種学習会を開催している。



写真4：学習会風景

(3) 株式会社マルタによる情報交換

- ・機関誌「モグラ便り」を通じて全国各地の有機栽培生産者との情報交換を行っている。

7 今後の課題と方向

(1) GAP（適正農業規範）認証制度導入によるブランド化

- ・今後の国内外において農産物を生産する上で必須事項と考えられる GAP 認証制度について、一番ハードルの高い「GLOBALGAP」の平成 21 年度内の認定取得を予定しており、取得を契機に自社ブランド力をさらに高める。

(2) 労働力の確保

- ・少子化、高齢化にともなう農業労働力となっている経営体への対応策を図る。

(3) 機械化の推進

- ・労働力不足を補完し生産効率を高めるため、自社に適合した能力ある選果機械等の設備投資を進める。

(4) 地域農業を牽引

- ・地域農業のリーダーとして情報発信を行うとともに、有機農業の生産技術の向上や高付加価値化を図り、地域農業の振興や北見産のブランド化に努める。



写真5：「丸富青果」の皆さん

〈作成：網走農業改良普及センター〉